概　要

本セッションは、「在日コリアン―混淆と変容」と題して、四人の在日作家の作品を中心に議論が展開された。

まずプリンストン大学のリチャード・オカダ氏は、「文化は常に同時に戦争なり」 というWerner Hamacherの論文より取った言葉を題名に、在日韓国人を主題として2000年に直木賞を受賞した金城一紀Kaneshiro Kazukiの小説『ＧＯ』を、監督Yukisada Isaoによるその映画版（2001）と比較することで 議論をすすめた。小説では主人公、杉原の父親が国籍を朝鮮民主主義人民共和国から 大韓民国に変更しようとする逸話を冒頭におき、「総連」や「民団」に関する説明も盛っている。だがそれらは映画では省略される。辻堂海岸（と映画では特定されない）に息子を連れ出した父親は、海を見やって息子を「ひろい世界」へと誘う。「国籍は金で買えるぞ」という父親の繰り言に、論者は強い、反国民ー国家意識の現れを見る。普段は暴力的で粗暴な振る舞いも多い人物として描かれる父親の国籍変更の意思が、何もハワイ旅行のためではなく、むしろ息子の将来を思ってのことだったことを息子が悟る場面で、杉原は「いつか俺が国境線を消してやるよ」と発言する。こうした主人公の態度は、民族学校では「開校以来のバカ」「民族反逆者」のレッテルを貼られるが、そこで「僕たちは国なんてものは持ったことがありません」と発言して、主人公を助けた少年が、「金一」だった。「開校以来の秀才と評判の金一は、在日の女学生を助けようとして、日本人の学生に殺害される。作家はこの小説を自分の恋愛の物語と規定しており、いかなるイズムを伴った主義主張からも自由でありたいと望んでいるが、実際には物語には、在日の境涯ゆえの政治問題がつきまとう。主人公の恋人となる桜井は、自分の父から「血が汚い」中国人や朝鮮人とはつきあってはならないと、釘を刺されており、そのために二人の関係は進展しない。題名に取られた最後の「行きましょう」も、その目的地は判然としない。論者に従えば、映画版は、俳優の選択や原作の地域性などを中立化することなどで、国際的な商機を探るとともに、政治的な含みを除外することでグローバルな普及に適した姿へと変貌した。だがそれなら小説は、伝播するにふさわしい政治的主張があるならそれを主張することにこそ利点があるのか、と論者は自問する。国籍へと拘るかぎり他者に開かれることはないが、他者に溶け込むことなしに他者に開かれることは、文化的背景を失っては実現できない。差異を抹消することが理想ならば、この理想は自己破壊へと至りつく。論者はこのアポリ

アのうちに、自己特権化の誘惑からの脱却の困難を見る。結論で論者は、真の自律なくして平等性は確立されないと述べるが、評者としては、むしろ多様性を確保する地盤が文化の単一栽培からいかに自由たりうるのかに、優れて北米合衆国的な問題が存しており、在日の問題がこの議論の土俵に乗るのか否か、そして日本における在日問題が韓半島ではなお正面から相手にされない状況にこそ、より深刻な問題が探られるのではないかとの意見を持った。

孫才喜氏は、作家、張赫宙（1905－1998）に焦点をしぼり、その詳細な経歴を分析することを通じ、日本支配下で日本語作家として立った作家の国語選択を問題とした。張の東京における日本文壇への参画は、韓国文壇からは罵倒、嘲笑を受け、作家はそれに憤慨して、日本語作家としての独立宣言を公表する。それはさらに祖国への罵倒に等しい発言へと繋がり、それが日本人側の見解に同調したものであったため、さらに朝鮮側知識人の批判に晒されることとなる。こうした心理的軋轢の背景として、論者は親日的姿勢への傾きと、近代性獲得への志向が重層的に癒着していた文化状況を摘出する。とともに東京の文壇に受け入れられる朝鮮を描く行為が、祖国との疎外と表裏一体であったことも、否定できない。『加藤清正』（1940）のような歴史小説、万宝山事件に取材した『開拓』（1943）は、民族間の軋轢のなかで個々人の立脚点の対比を試み、中立的で多面的な視点を獲得しようと努めている点を論者は評価する。内鮮一体を主題とした作品群も、当時の皇民化政策に貢献する価値観の表出は当然としても、そこに孕まれた屈曲した現実を描いた点を、論者は評価しようとする。戦後の作品群に関しては、発表時間の都合で詳述できなかったが、移住民としての作家のディアスポラ的性格の検討には、他の作家の例との比較など、さまざまな可能性が残っているように見受けられた。韓半島では、親日との評価ゆえに、従来議論の対象にもならなかったこの作家を分析する論者の試みには大きな意義を認めうるが、時代背景を捨象しても有効な理論的枠組みの設定には、なお多くの課題が残っており、また分析方法にも、切り込みに尚独自の視点を切り開く可能性が残されている。

(稲賀繁美)

南富鎮氏の発表「デイアスポラの内面心理－日本語と日本女性に向かう情熱」は、韓国人作家皮千得や蔡万植、在日作家金城一紀などの作品を通して植民地時代の内鮮恋愛や内鮮結婚、日本語への欲望の問題などを扱ったものである。 発表者は、作品に描かれた主人公（韓国朝鮮人）の欲望は終局的